

1. 授業から学んだこと

授業から学んだことは、目的やテーマを明確にすることの大切さである。私は、中学1年生から3年生までの全学年を担当し、合計28コマの授業を体験させていただいた。全学年がバレーボールの授業に取り組んでおり、1・2年生はサーブのみ、3年生はサーブとアタックという内容で授業を考えた。なぜ、毎回の授業で生徒にどのような能力を身に付けさせたいのかをはっきりさせることが本当に重要であると感じたのか。それは初めて授業を行った際に、取り組ませたい練習が多すぎて各々の練習時間が短くなってしまい、結果的に様々な練習に取り組んだだけで能力を向上させることが出来なかった経験をしたからだ。あれもこれもと内容を盛り込み過ぎて本来の目的やテーマを達成することができないのは指導者としてあってはならないことであり、目的やテーマを明確にすることで本当に取り組ませたい内容や時間配分が変わってくると実感した。

2. 生徒との交流で学んだこと

生徒との交流で学んだことは、誰とでも分け隔てなく関わり合うことの大切さである。授業の中で生徒の行動で気になったことがある。それは、障害のある生徒と分け隔てなく授業に取り組んでいたり、上手くできない仲間に対してアドバイスをしたり、ゲームでチャレンジしたことに対して全員で盛り上げるなど誰一人として嫌な雰囲気を作らず取り組んでいたことだ。相手のことを思いやり、みんなが楽しめるようお互いが気にかけているように思えた。これは、この先どのような環境下においても大事になることであり、人として備わってなければならない能力であると感じ、改めてお互いを尊重し合うことの大切さを学んだ。

3. 職員室や教官室での様子から学んだこと

職員室の様子から学んだことは、先生同士のコミュニケーションの多さである。毎日生徒の状態や何があったなどの報告をし合っているだけでなく、他愛のない会話を交わしお互いが話しやすい雰囲気づくりを行っているように思えた。気を遣っているというわけではなく、仲が良いなという印象を受けた。しかし、あくまでも一部しか見られていないので実際どのような状態なのかはわからないが、いつでも相談し合える関係性を築くことはどこに行っても大切なことであると感じるため、積極的にコミュニケーションを図ることが重要であると学んだ。

4. 教育実習全般にわたって一番大きな学びとなったもの

教育実習での一番の大きな学びは対応力である。初めて大勢の前で授業を行い説明不足や指導の曖昧さがあり戸惑いもあったが、3日目ごろから要領をつかみ堂々と授業を行う

ことができた。説明の仕方や話し方に決まったものではなく、個々の自由でやりやすいようにしていいと言われていたため、私は私なりの授業をすることを心掛けた。今まで体験したことない環境にいち早く適応すること、その対応力がこれから先どのようなコトがあっても必要であり、対応力が早いほど成長スピードも早いと感じた。